

### 3/20 マルコの福音書 11 章 15-19 節「主の家は祈りの家」

小池 宏明牧師

今日の箇所は、主イエス様が十字架に掛かれる受難週の二日目に実行された「宮清め」の場面である。

ここで言う「宮」とは神殿本体を含む敷地全体を指す。

#### \*神殿の腐敗

当時の神殿の様子は、イエス様の目から見れば、「強盗の巢」(17 節後半)と呼ぶほどに酷かった。神殿の管理者である祭司長が敷地内で、神殿での礼拝のために必要なものを運んだり、売ったり、両替したりすることを許可していた。これは便宜を図るという名目で、祭司長と商売人たちが一緒になって、私腹を肥やす仕組みであった。礼拝の場を利用しながら金もうけをしている現実に対して主イエス様は怒りを示された。15 節後半から 16 節「・・・イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。また、だれにも、宮を通して物を運ぶことをお許しにならなかった。」主イエス様は、ろばの子に乗ってエルサレムに入場した日の夕方、神殿内のすべてを見て回っておられた。主は、一旦ベタニア村に退いて、おそらく一晩祈りながら、父なる神様の御心を求め、翌日になって、宮清めを実行された。神殿を「父の家」と呼んで心から愛していたイエス様であられるからこそその「宮清め」だった。主イエス様の行動と語った言葉に対して、神殿を管理している祭司長や律法学者たちは、本当なら、悔い改めるべきだった。ところが、18 節前半「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した・・・」彼らは、主なる神様を見上げようとせず、イエス様が悔い改めに導こうとしておられるのに、「イエスは邪魔者だ」と考えてイエス殺しの計画を進めることになる。

#### \*「祈りの家」になっているか

17 節前半「そして、人々に教えて言われた。『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか・・・」

今日の私たちは、この教会堂という「祈りの家」で共に集まり、礼拝を捧げ、そして祈り続けている。もちろん、今は、どこでも、主イエス様のお名前によって祈ることができる。しかし、集まって祈ることも大切なのだ。古河教会はこの新久田に会堂をお捧げしてから 32 年目である。この会堂が、常に「祈りの家」と呼ばれるような場所になっているだろうか？神様の栄光よりも、人間の都合が優先されるようなことはないだろうか？主の御前に出て、思い巡らし、祈ろう。